

# SYLLABUS

(講義案内)

2008 年度 慶應義塾大学経済学部

## 現代社会史

### 「いのち」の歴史学

春学期集中 (2 限・3 限連続) 土曜日 10:45 ~ 12:15

13:00 ~ 14:30

三田キャンパス・西校舎 501 番教室

教授 清水 透

教授 高草木光一

## 〈 予 定 表 〉

### 序 論

4月12日 「いのち」の視点から世界を考える  
高草木光一  
大村 次郷

### 第 部 「いのち」をめぐる現在——先端医療が突きつけること

4月19日 生体移植，脳死・臓器移植  
河野 太郎  
山口研一郎

4月26日 遺伝子操作，生殖医療  
福岡 伸一  
迫田 朋子

5月10日 優生思想と自己決定権  
長沖 暁子  
田中 智彦

5月17日 討論会(1)  
皆吉 淳平  
土屋 敦

### 第 部 人類史のなかの「いのち」——「東洋」の再発見

5月24日 ウィグルの視点，チベットの視点  
マリア・サキム  
小川 康

6月7日 『医心方』の倫理観，神道の自然観  
榎 佐知子  
鎌田 東二

6月14日 宗教と医学の間  
島園 進  
清水 透

6月21日 討論会(2)  
清水 透  
高草木光一

### 第 部 「いのち」の現代史——われわれの「歴史学」へ

6月28日 「いのち」の間  
米沢 慧  
吉岡 忍

7月5日 揺らぎのなかの「いのち」  
最首 悟  
立岩 真也

7月10日 [補講日] 討論会(3)  
清水 透  
高草木光一

7月12日 「いのち」の構築  
芹沢 俊介  
伊勢崎賢治

## 開講にあたって

いま、われわれは大きな時代の転換点に立っています。近年の生命科学の急速な発展によって、人類は、臓器移植、遺伝子操作、クローン技術など「生命」そのものを改変し、あるいは創造しうる言わば「神」の領域に一歩足を踏み入れた、と言ってもいいだろうと思います。

先端技術は、われわれの「いのち」を救うかもしれませんが。その「恩恵」を否定しすることはできません。しかし、「生命」を自在に操る技術の開発は、とりもなおさず、われわれひとりひとりの「いのち」が操られる可能性をもつことを意味します。誰もが、先端医学・医療のつきつける「いのち」の問題から無縁ではありえないのです。

では、この新しい事態をどのように分析し、どのように受け止めるか。高度に専門的な内容を理解し、それが及ぼす多方面への影響を考察するのは容易なことではありません。しかし、逆に言えば、「人類」そのものに関わる転換点に立つからこそ、細分化された諸専門分野を横断的に再編成する大きなチャンスであるとも言えます。いまこそ「総合的」な知が求められる時代もないでしょう。

本講座においては、まず序論で、高草木光一と大村次郷氏が、異なる方法で全体を俯瞰しますが、第 部「『いのち』をめぐる現在——先端医療がつきつけること」では、立場の異なるお二人の「対立」点を明確にするよう試みました。河野太郎氏と山口研一郎氏は、脳死・臓器移植をめぐる真っ向から対立する見解をもっています。福岡伸一氏と迫田朋子氏との間には、最先端の生命科学研究者とそうした先端科学を市民的視線で批判的に報道してきたジャーナリストという対立が含まれてい

ます。長沖暁子氏と田中智彦氏は、ウーマンリブ運動と哲学という異なる領域を基盤として、「自己決定権」に関しておそらく相反する見解に立つと思われます。

もちろん「対立」をあおることがこうした「対論」の目的ではありません。優劣を競うものでもありません。複雑な事象を多面的に把握し、言わば「共通の言語」をつくるために必要な作業だと考えてください。

第 部の最後には、若手の生命倫理研究者、皆吉淳平氏と土屋敦氏が、みなさんの理解が深まり積極的な討議ができるよう手助けをしてくれるでしょう。

第 部を「人類史のなかの『いのち』——『東洋』の再発見」として、伝統医学の問題に正面から取り組むことにしたのは、第 部の問題を歴史的に相対化するためです。西洋近代医学は、どのようにして伝統医学から離れ、そして科学として発展する過程で何を失ったのか、という問題は、伝統医学との比較を通さないかぎり解明できないものと思います。伝統医学と西洋近代医学の連続性と非連続性の問題を通して、そもそも「医学」「医療」とは何だったのか、現在われわれは何を取り戻すべきなのか、何を目指すべきなのかが明らかになるだろうと思います。なお、「東洋」と鍵括弧をつけたのは、地理的な「東洋」に限らず、世界の先住民社会に今も息づいている民俗医療の世界を包括させるためです。

したがって、第 部の「対論」は、「対立」よりも「補完」が前面に出てきます。マリア・サキム氏と小川康氏は、ともに西洋近代医学に知悉しながら、それぞれウイグル医学、チベット医学を研究、実践している方々です。榎佐知子氏、鎌田東二氏は、それぞれ古典医学、神道の研究者ですが、ともに「日本」を通して東洋全体の発想を大きく捉えようとしています。島園進氏と清水透の対論は、前の二つの対論を踏まえて、

「宗教」との関係から「医学」を人類史のなかに位置づけなおす協同的な試みになるでしょう。

さて、第 部は、『いのち』の現代史——われわれの『歴史学』へ」と名づけました。ここでは、「医学」や「医療」が社会のなかで相対化されて扱われます。「いのち」の問題は、医学や医療の問題だけには収まり切らないし、医学や医療の問題も社会全体のなかに位置づけなおす必要があります。

われわれは、「いのち」の問題を、最終的には、ベトナム戦争を起点とする現代史のあり方に求めることにしました。第二次世界大戦では、ナチスが優生政策を苛烈に貫徹させ、日本の 731 部隊が人体実験を行ない、そして最後にアメリカ軍が広島・長崎に原子爆弾が投下しました。今日「いのち」を考えるうえで基本的な事柄は、この時期に既におおたその原型が現れています。

その後、戦争と武力の放棄を謳った日本国憲法が制定され、アジア・アフリカの多くの植民地が独立し、世界は変わったかのように見えました。ところが、ベトナム戦争という「理由のない戦争」「大義のない戦争」が第二次世界大戦後20年を経て本格化します。そこでは、「枯葉剤」という遺伝子に直接打撃を与えるような武器が使われ、ベトナム戦争終了後も、その「被害」は延々と続いています。

ベトナム戦争のさなかから、反戦運動、公民権運動、学生運動等を通して近代の価値観の大きな転換が試みられました。現代史を「下から」書き換えようとする試みもまた、ベトナム戦争以来の歴史をもっていると言えます。しかし、ベトナム戦争終了後も、さらには冷戦構造の終結後も、世界から戦争が消えたことはありません。むしろ「戦争」そのものが常態化しているのが、「現代史」だと言ってもいいでしょう。「いの

ち」を救うと称する先端医学・医療がベトナム戦争以後発達する一方で、果てしのない「いのち」の殺戮が行なわれ、しかも、その二つの行為は、「科学」の面でも「資本」の面でも共通の土壌をもっていると言わなければなりません。

「救命」と「殺戮」の構造を解明することは、途方もなく大きな課題です。しかし、「いのち」の問題を追及していけば、結局われわれが行き着くのは、われわれ自身が立っている「現代」の構造的解明以外にはありません。「いのち」の問題は、われわれ自身の手で「現代史」を書き換えていくことを最終的に要求するのです。

この課題に取り組むにあたって、まず手がかりになる二人の人物について考えました。

ひとりには、ベトナム戦争の戦場に赴き、取材した報道カメラマン・岡村昭彦氏（1929-1985年）です。岡村氏は、東京医学専門学校（現・東京医科大学）中退という異色の経歴をもち、「技術」ではなく「思想」でシャッターを切り続けました。その業績は、アメリカの雑誌『LIFE』で大きく評価されることとなります。岡村氏は、戦場での取材を続けながら、同時代に解明された DNA の二重螺旋構造に着目します。その後「生命倫理」と「ホスピス」に精力的に力を注ぎました。彼がどのようにして戦争の問題と生命科学、生命倫理の問題を結びつけて考えていたのか、何に希望を託していたのか、その再評価はいまこそなされるべきであると考えます（岡村春彦・暮尾淳編『岡村昭彦集』全6巻、筑摩書房、1986-87年、参照）。

もうひとりには、2001年度秋学期、2002年度秋学期、慶應義塾大学経済学部特別招聘教授として「現代思想」を担当された作家の小田実氏（1932-2007年）です。小田氏は、「ベトナムに平和を！ 市民連合」（ベ

平連)の代表として、ベトナム反戦運動を展開しました。「いのち」の問題は、小田氏の創作、評論活動のなかでも中心的な位置を占めていたと思われます。本学部での講義を通して、とくに山口研一郎氏との「対論」によって、小田氏は、生命科学や生命倫理の問題が戦争と平和の問題と緊密に結びついていることを強く意識するようになります(飯田裕康・高草木光一編『ここで跳べ——対論「現代思想」』慶應義塾大学出版会、2003年、参照)。それ以前から、「全体医学」の問題にも関心を持ち続けていました。昨年亡くなられた小田氏の果たせなかったことが、「いのち」の問題をめぐる思想の集大成だったのではないかと考えています(飯田裕康・高草木光一編『生きる術としての哲学——小田実最後の講義』岩波書店、2007年、参照)。

岡村昭彦と小田実という、同時代に生き、異なる方法でベトナム戦争に関わった二人の思想家の軌跡が第一部、そしてこの講座全体の基礎にあると考えてください。

その第一部ではまず、岡村昭彦氏の運動を支え、その没後は遺志を受け継いで運動を続けている米沢慧氏、高校時代からベ平連に参加し、小田実氏と身近に接しつつ、独自の領域で時代を見通してきた吉岡忍氏のお二人に、ベトナム戦争以後の現代史を「いのち」の観点から「対論」してもらいます。

さらに、「いのち」をめぐるわれわれの現代史の展開にあたって、水俣病の問題、障害者運動の視点は、欠かせないものと考え、それぞれの立場で思考を独自に練り上げる仕事をされている最首悟氏と立岩真也氏に「対論」をお願いしました。

最後は、「自殺」と「戦争」の問題です。「自殺」は「社会的殺人」という側面をもちます。1998年以後毎年3万人以上の自殺者を出している

社会は、「異常だ」と言わざるをえないでしょう。さらに、国外問題としては、日本が世界平和にどう貢献できるのか、というきわめて重要な政治的問題が横たわっています。この問題を、芹沢俊介氏、伊勢崎賢治氏のお二人に担当していただき、「いのち」の問題をめぐる総括にしたいと考えています。

第 部の三つの「対論」はどれも、「総合」が強く意識されています。

翻れば、「現代社会史」は、2006年度に経済学部専門特殊科目として設置され、その第一年度は「東アジア・スタンダードの創造」を統一テーマとして掲げました（担当者：松村高夫、高草木光一）。中国から歩平氏（中国社会科学院近代史研究所所長）を、韓国から池明観氏（元韓国翰林大学校翰林科学院日本学研究所所長、元東京女子大学教授）を慶應義塾大学経済学部特別招聘教授としてお招きし、日韓中の歴史認識の擦れを検討したうえで、東アジア共通の価値を探ることを目的としました。そして講座全体の結論として、東アジア共通の価値として提唱されたのが「絶対平和」でした。地球上でただ一つ冷戦構造の残っている東アジアにおいて「絶対平和」を共通の価値とするのは、ある意味では逆説的であるかもしれません。しかし、アメリカを中軸とするグローバル・スタンダードに対抗しうる発信力のある理念としては「絶対平和」しかありえない、と考えるに至ったのです（松村高夫・高草木光一編『連続講義 東アジア 日本が問われていること』岩波書店、2007年、参照）。

そして、この「絶対平和」を希求し、そこにアイデンティティを見いだそうとする試みは、実は「歴史学」の問題と深く関わっています。東アジア共通の価値の探求は、日韓中の歴史認識の擦れという現実から出発しています。そしてその現実には、歴史学の無力さと深く関わっている。

そう考えざるをえませんでした。なぜ、歴史学は、言論界においても一般社会においても、近年急速にその影響力、牽引力を失ってしまったのか。偏狭なナショナリズムを超えた、しかし魂に喰い込むような「歴史学」を言わば「下から」構築することはできないのか。それが、残された課題でした。

本年度は、「現代社会史」の実質第2年度にあたります。この2006年度の試みを継承しつつ、新たな方向を探るべく、統一テーマとして「『いのち』の歴史学」を掲げました。

「いのち」の問題に無関係な人間はいません。「いのち」の思想に優劣もまたありません。ひとりひとりが自らの身体を通して考え抜いた「いのち」の思想は、それぞれが同じように貴重なものでしょう。その「いのち」という観点から、われわれの依って立つ「現代」をわれわれ自身の手によって「歴史化」すること——それを今年度のこの講座の最終的な目標に設定したいと思います。この講座が3回の「討論会」を設け、みなさんの積極的な参加を前提に構成されているのは、まさに「未来へ向けてのわれわれの現代史」の構築のためであるということを理解してください。

## 「現代社会史」履修上の注意事項

### (1) 時間配分

本年度の「現代社会史」は、春学期集中で2限（10：45～12：15）・3限（13：00～14：30）の連続の講義となります。

毎回、原則として二人の講師を招き、講義とコメントをお願いします。仮に二人の講師をA講師・B講師とすると、2限には、A講師が60分講義し、残りの30分は、B講師のA講師に対するコメントとそれに対するA講師の回答、A講師と参加者との質疑応答に充てます。3限は、A講師とB講師の役割が逆転すると考えてください。

このように通常の回でも参加者と講師との間の質疑応答の時間を一定程度とりますが、他にも議論への「直接参加」の道が用意されています。

5月17日、6月21日、7月10日は「討論会」となっています。これまでの議論を踏まえ、あるいは今後の議論の行く末を見据えて、誰でもが自分の意見を言える場にしたいと思っています。また、必要に応じて、講師を招いて基調報告をしてもらうことも考えています。

さらに、501番教室は、4限（14：45～16：15）も押さえてありますので、講師の都合が許せば、「延長戦」をすることも可能です。

### (2) テキスト・参考文献

テキストはとくに指定しません。各回の参考文献は、講師の主要著作を参考にしてください。また、毎回できるだけ多くの資料を教室で配布しようと思っています。

### (3) 試験

春学期末に試験を行いません。

4月12日

## 「いのち」の視点から世界を考える

高草木 光 一

大 村 次 郷

脳死・臓器移植、遺伝子操作をはじめとして先端医療がつきつけるさまざまな問題を手がかりとして、ベトナム戦争以後の現代史のなかで顕著に現れる、生存への侵犯の構造の考察を行ない、新たな「『いのち』の歴史学」の構築を目指すのが、今年度「現代社会史」の狙いである。初回に当たっては、コーディネーターのひとりである高草木光一が、どのような問題意識でこの講座が組み立てられているのかを概説するとともに、他の講義とは異なるこの講座の特色についてのガイダンスを行なう。

後半は、アジアにおける戦争の傷跡を長年にわたって報道しつづけているフォトジャーナリスト大村次郷が、ベトナム戦争以後のアジアの状況を本講座のための撮りおろし作品も含めてビジュアルに解説する。

高草木光一（慶應義塾大学経済学部教授）

[略 歴]

1956年生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業。慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学。慶應義塾大学経済学部助手、助教授を経て、2001年より現職。

[主要著作]

- 『連続講義 東アジア 日本が問われていること』（共編著）岩波書店，2007年。
- Marx for the 21st Century, Routledge, 2006.（共著）
- 『社会主義と経済学』（共著）日本経済評論社，2005年。
- 『市民的共生の経済学』（共編著）全4巻，弘文堂，1999-2003年。

大村 次郷（フォトジャーナリスト）

[略 歴]

1941年生まれ。写真家・濱谷浩氏に師事。中東、インド、中央アジア、中国、東南アジアなど、各地のフォト・ルポルタージュを手がける。NHKのドキュメンタリー番組「シルクロード」「大黄河」「四大文明」「文明の道」「新シルクロード」ほかのスチールも担当。

[主要著作]

- 『遺跡が語るアジア』中公新書，2004年。
- 『アジアをゆく』全7巻，集英社，2000-01年。
- 『アジャント壁画』全3巻，日本放送出版協会，2000年。
- 『アジア食文化の旅』朝日文庫，1989年。

4月19日

## 生体移植，脳死・臓器移植

河野太郎

山口研一郎

1997年10月に施行された臓器移植法は多くの論議を呼んだが、10年間で二百数十件程度の移植が実施されるにとどまった。現在問題になっているのは、とくに子どもの臓器提供を容易にするための立法措置であり、河野案はそのひとつである。河野太郎は、どのような未来を見据えて、臓器移植法の改正を推進しようとしているのか。また、きわめて稀有な、子から父への生体肝移植を行なった当事者として、どんな葛藤を経験しているのか。

いっぽう、山口研一郎は、著書『脳死・臓器移植拒否宣言』に見られるように、脳死・臓器移植に真っ向から反対している立場の医師である。かつて脳神経外科医として先端医療の最前線にいた医師を、何がどう変えたのか。いま彼の思い描く医療とは何か。

今後のあるべき人間関係という壮大なビジョンのもとに、二人の対話は行なわれる。

河野 太郎（衆議院議員）

[略 歴]

1963年生まれ。慶應義塾大学経済学部中退，アメリカ・ジョージタウン大学卒業。1996年衆議院議員，以後連続4回当選。2002年，父・洋平の肝臓病悪化のため，生体肝移植のドナーとなり，肝臓移植手術を行なう。

[主要著作]

『この国のゆくえ』（共著）ダイヤモンド社，2006年。

『決断 河野親子の生体肝移植』（共著）朝日新聞社，2004年。

『河野太郎の国会攻略本——あなたの政策で日本が変わる』英治出版，2003年。

山口研一郎（医師，現代医療を考える会代表）

[略 歴]

1949年生まれ。長崎大学医学部卒業。脳神経外科医。高槻市にやまぐちクリニックを開業。地域医療・福祉に従事しながら，脳死・臓器移植，生殖医療，遺伝子診断・治療，再生医療など，先端医療がはらむ問題について検証。

[主要著作]

『脳受難の時代——現代医学・技術により蹂躪される私たちの脳』御茶の水書房，2004年。

『脳死・臓器移植拒否宣言——臓器提供の美名のもとに捨てられる命』（共著）主婦の友社，2000年。

『操られる生と死——生命の誕生から終焉まで』（編著）小学館，1998年。

『有紀ちゃんありがとう——「脳死」を看続けた母と医師の記録』（共編著）社会評論社，1992年，増補改訂版，1997年。

4月26日

## 遺伝子操作，生殖医療

福 岡 伸 一

迫 田 朋 子

遺伝子操作や生殖医療は、先端医学・医療のなかでも著しく進歩を遂げたものであるとともに、危うい影の部分も多く秘めている。遺伝子操作の技術は日常生活のさまざまな部面を変容させていく可能性をもっているし、生殖医療は「生誕」のイメージを大きく変えようとしているかもしれない。先端医学・医療の問題は、実はわれわれ自身に直接的に関わってくるものであるにもかかわらず、その情報は限られている。

生命科学の最先端で研究を続けながらも、「自然」の前には跪くほかはないと言う科学観をもつ福岡伸一に、生命科学の躍進を内部から分析してもらうとともに、「市民」の視線で生命科学・先端医療の問題を注視しつづけてきた迫田朋子に、どこに「社会的な」問題点があるのかを考察してもらう。

福岡 伸一（青山学院大学理工学部化学・生命科学科教授）

[略 歴]

1959年生まれ。京都大学農学部卒業。京都大学大学院農学研究科博士課程修了。ハーバード大学医学部博士研究員，京都大学大学院農学研究科助教授等を経て，2004年より現職。

[主要著作]

- 『生物と無生物のあいだ』講談社，2007年。
- 『ロハスの思考』木楽舎，2006年。
- 『プリオン説はほんとうか？』講談社，2005年。
- 『もう牛を食べても安心か』文藝春秋，2004年。

迫田 朋子（NHK 制作局チーフディレクター）

[略 歴]

1956年生まれ。東京大学医学部保健学科卒業。アナウンサー，解説委員を経て，2003年より現職。

[主要著作]

- 『これが脳低体温療法だ』（共著）日本放送出版協会，1997年。
- 『脳が世界をつくる』日本放送出版協会，1993年。
- 『医療現場取材ノート——健康であること』筑摩書房，1991年。
- 『NHK スペシャル脳死』（共著）日本放送出版協会，1991年。

5月10日

## 優生思想と自己決定権

長 沖 暁 子  
田 中 智 彦

近代国家は優生思想と深く関わってきた。ナチスの「安楽死法案」だけではない。障害者の強制断種手術の例は福祉国家スウェーデンにも見られたし、「癩予防法」の歴史はこの日本も例外ではなかったことを物語っている。では今日、もはや優生思想が国家の政策のなかで具体化されるおそれはないのだろうか。より「健康」であること、より「正常」であることを願い、あるいはより強く、より美しい身体を求める「内なる優生思想」は、むしろ強度を増しているようにも思われる。それとも優生思想は、「個人の選択」という範囲のうちに押し込めてさえおけば、旧来の国家的優生思想とリンクすることはないのだろうか。たしかにわれわれには「自己決定権」という「武器」がある。だがはたしてそれは、優生思想を国家の政策から切断するのにどれほど有効なのだろうか。かえってそこには何か危ういものがあるのではないだろうか。

こうした問題をめぐって、優生保護法改正問題にウーマンリブ運動の現場で関わってきた長沖暁子と、「メタ・バイオエシックス」の観点から「生命倫理」そのものの批判的検討を行なっている哲学・生命倫理の研究者田中智彦に、異なる立場から問題を探ってもらおう。

長沖 暁子（慶應義塾大学経済学部准教授）

[略 歴]

1954年生まれ。東京都立大学理学部生物学科卒業。慶應義塾大学経済学部助手、専任講師を経て、2000年より現職。「SOSHIREN・女〈わたし〉のからだから」（旧82優生保護法改悪阻止連絡会）会員。

[主要著作]

『リプロダクティブ・ヘルスと環境——共に生きる世界へ』（共著）工作舎、1996年。

『バイオエシックス——先端医療を考える視点』（共著）ゆみる出版、1988年。

「生殖補助医療の進歩——女性のからだへの自己決定権と生殖技術の発達」『産科と婦人科』69巻6号、2002年。

「生殖技術に対する日本産科婦人科学会の対応」『年報 科学・技術・社会』7巻、1998年。

田中 智彦（東京医科歯科大学教養部准教授）

[略 歴]

1967年生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。同大学大学院政治学研究科博士課程単位取得退学。同大学教育学部助手を経て、2000年より現職。

[主要著作]

『政治と倫理のあいだ』（共著）昭和堂、2001年。

「生命と身体」『現代政治理論』ブレーン出版、2008年。

「『命のリレー』の果てに——日本へのバイオエシックス導入の『前史』から

『思想』977号、2005年9月。

「バイオエシックス導入に至る言説の諸類型——その『前史』からの問いかけ」

『応用倫理学研究』2号、2005年7月。

5月17日

## 討 論 会 (1)

皆 吉 淳 平  
土 屋 敦

第 部を総括する討論会。まず、生命倫理の若手研究者・皆吉淳平，土屋敦の二人が，第 パートで提出された問題群についてそれぞれの立場から整理する。そのうえで，フリー・ディスカッションの場を設けたい。必要に応じて，ゲスト・スピーカーを招くこともありうる。

皆吉 淳平（慶應義塾女子高等学校・芝浦工業大学非常勤講師）

[略 歴]

1977年生まれ。慶應義塾大学文学部人間関係学科卒業。東京大学大学院人文社会学系研究科社会学専門分野修士課程修了。慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程単位取得退学。

[主要著作]

『〈入門〉グローバル化時代の新しい社会学』（共著）新泉社，2007年。

『社会学と優生学——ロンドン社会学会における『都市学』と『優生学』』『哲学』（三田哲学会）114号，2005年3月。

『臓器移植における『公平性』の発見』『ソシオロゴス』29号，2005年9月。

『『社会的合意』とは何か？——生命倫理における『社会』』『現代社会理論研究』15号，2005年9月。

土屋 敦（神奈川県立保健福祉大学非常勤講師）

[略 歴]

1977年生まれ。東京大学文学部哲学専門分野卒業。同大学大学院人文社会学系研究科社会学専門分野修士課程修了。現在，同博士課程在籍中。

[主要著作]

『エンハンスメント論争』（共著）社会評論社，2008年。

『『不幸な子どもの生まれない運動』と羊水検査の歴史的受容過程——『障害児』抑制政策（1960年代半ば—1970年代初頭）興隆の社会構造的要因』『生命倫理学研究』17巻1号，2007年10月。

『北東アジアの優生法——日本・韓国・台湾・中国の立法過程比較分析から』『コロキウム』創刊号，2006年5月。

『日本社会における『胎児をめぐる生命主義』の源流』『ソシオロゴス』28号，2004年8月。

5月24日

## ウィグルの視点，チベットの視点

マリア・サキム

小川 康

中国のなかでウィグルやチベットは「辺境」の位置にあるが，ユーラシア大陸全体のなかでは，むしろ中心的な位置にあると言えるかもしれない。実際に，ウィグル医学やチベット医学は，「伝統医学」のなかで中軸的な地位にあった。いまもなお生き延びているウィグル医学やチベット医学は，どのようなものとして社会的に機能しているのだろうか。近代医学と比較したときに，どのような独自性を持ち，どのような連続性をもっているのだろうか。

日本に数度の留学・滞在経験のあるマリア・サキムと，インド・ダラムサラにあるチベット医学薬学大学を「外国人」として初めて卒業した小川康に，それぞれウィグル医学，チベット医学の視点から近代医学のあり方を逆照射してもらう。

マリア・サキム (馬麗亜沙克木)

(慶應義塾大学経済学部特別招聘准教授, 元新疆医科大学副教授)

[略 歴]

1945年生まれ。中国・新疆大学化学学部卒業。1972年より新疆医学院(現・新疆医科大学)に勤務, 2005年同化学研究室主任, 副教授で退職。この間しばしば来日し, 東京大学, 東京理科大学客員研究員, 富山医科薬科大学, 北見工業大学客員助教授等を歴任。

[主要著作]

『癒す力をさぐる——東の医学と西の医学』(共著) 農山漁村文化協会, 2006年。

『ウイグル族の伝統医薬学及びその生薬』『和漢薬研究所年報』(富山医科薬科大学) 28巻, 2001年。

『新疆における伝統的製薬文化』『アジア遊学』(勉誠出版) 1号, 1999年。

“Extraction and Transport of Ions in a Liquid Membrane Containing Crown Ether,” Bulletin of the Chemical Society of Japan, Vol. 60, No. 4, April 1987.

小川 康 (チベット医師, 薬剤師)

[略 歴]

1970年生まれ。東北大学薬学部卒業。薬草会社, 薬局, 農場, ボランティア団体等に勤務後, 99年よりインド・ダラムサラにてチベット語・チベット医学に取り組み, 2007年同地にあるチベット医学暦法学大学卒業。

[主要著作]

「ヒマラヤの宝探し——チベットの高山植物と薬草たち」

([http://www.kaze-travel.co.jp/tibet/tibet\\_ogawa000\\_1.html](http://www.kaze-travel.co.jp/tibet/tibet_ogawa000_1.html))

6月7日

## 『医心方』の倫理観，神道の自然観

榎 佐知子

鎌 田 東 二

医学は、人類とともに古いと言ってもいい。日本にも、9世紀に100巻にまとめられたという『大同類聚方』や、10世紀に丹波康頼によって編集された『医心方』全30巻がある。こうした古典医学の文献は、これまで顧みられることが少なかったが、実はそのなかには医学や医療の本質を決るような箴言が散りばめられている。それを数十年という年月をかけて掘り起こしているのが榎佐知子である。

いっぽう、日本の伝統医学やそれに基づく倫理観は、その基底に日本古来の神道の自然観をもっていると思われる。神道を分野横断的な近代的英知によって再読することをしかけてきた革命児・鎌田東二は、いま生命倫理の問題を自らの新たな課題の一つにしている。

この二人の対論のなかから、日本発の「生命倫理」の原型が提示される。

榎 佐知子 (古典医学研究家, 日本伝統医療科学大学院大学非常勤講師)

[略 歴]

作家・瀧井孝作に師事し文芸作品を発表するいっぽう, 独学で古医書の現代語訳に取り組み, 『全訳精解大同類聚方』で菊池寛賞, エイボン功績賞を受賞。医道顕彰会, 日本医史学会所属。

[主要著作]

丹波康頼撰『医心方』全訳精解, 全30巻33冊, 筑摩書房, 1993年より逐次刊行中。

『全訳精解大同類聚方』全100巻, 上・下2冊, 平凡社, 1985年。同(普及版), 5冊, 新泉社, 1992年。

『病から古代を解く』新泉社, 2000年。

『日本の古代医術——光源氏が医者にかかるとき』文春新書, 1997年。

鎌田 東二 (京都大学こころの未来研究センター教授)

[略 歴]

1951年生まれ。國學院大学文学部卒業。國學院大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。文学博士(筑波大学)。国際日本文化研究センター共同研究員, 客員助教授, ダブリン大学客員研究員, 武蔵丘短期大学助教授, 京都造形芸術大学教授等を経て, 2008年より現職。

[主要著作]

『霊的人間——魂のアルケオロジー』作品社, 2006年。

『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」精読』岩波現代文庫, 2001年。

『聖なる場所の記憶』講談社学術文庫, 1996年。

『身体の宇宙誌』講談社学術文庫, 1994年。

6月14日

## 宗教と医学の間

島 園 進  
清 水 透

先端医学・医療が次々に「夢」を実現させる技術を開発していくいっぽうで、われわれのなかの「死生観」の空洞化もまた進んでいる。「不老不死」という不可能な地点、不毛と絶望しかありえない地点に向かって「夢」を追い求めるといふパラドックスのなかで、「いのち」の感覚は徐々に希薄なものになっていく。かつて、近代医学の誕生以前には存在していた技術と価値観の調和に改めて目を向け、宗教と医学の連続性に立ち戻って考えることは、新たな「いのち」の獲得のために必要な作業のひとつだろう。

第 部を締めくくる位置にある今回は、宗教学の立場から生命倫理に切り込んでいる島園進とインディオ社会というフィールドから近代文明を見てきた清水透が、現代における「いのり」と「いのち」の関係の問い直しを試みる。

島園 進 (東京大学大学院人文科学系大学院教授)

[略 歴]

1948年生まれ。東京大学文学部宗教学・宗教史学科卒業。同大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学。筑波大学研究員，東京外国語大学助教授を経て，1995年より現職。シカゴ大学，フランス社会科学高等研究院，テュービンゲン大学の客員教授を歴任。

[主要著作]

『精神世界のゆくえ——宗教・近代・霊性』秋山書店，2007年。

『スピリチュアリティの興隆——新霊性文化とその周辺』岩波書店，2007年。

『いのちの始まりの生命倫理——受精卵・クローン胚の作成・利用は認められるか』春秋社，2006年。

『〈癒す知〉の系譜——科学と宗教のはざま』吉川弘文館，2003年。

清水 透 (慶應義塾大学経済学部教授)

[略 歴]

1943年生まれ。東京外国語大学外国語学部スペイン語学科卒業。エル・コレヒオ・デ・メヒコ歴史学研究科博士課程単位取得退学。東京外国語大学，獨協大学，フェリス女学院大学の各教授を経て，1999年より現職。

[主要著作]

『家族へのまなざし——市民的共生の経済学3』(共著) 弘文堂，2001年。

『エル・チチョンの怒り——メキシコにおける近代とアイデンティティー』東京大学出版会，1988年。

『コーラを聖なる水に変えた人々——メキシコ・インディオの証言』(共著) 現代企画室，1984年。

『現代医療と他者の命の物象化』『三田学会雑誌』94巻4号，2002年。

6月21日

## 討 論 会 (2)

清 水 透

高草木 光 一

第 部を総括する討論会。必要に応じてゲスト・スピーカーを招くこともありうる。

〈MEMO〉

6月28日

## 「いのち」の闇

米 沢 慧  
吉 岡 忍

1963年11月、アメリカの雑誌『LIFE』の表紙を DNA の二重螺旋モデルが飾った。これに着目したベトナム戦争報道カメラマン・岡村昭彦は、その後「バイオエシックス (生命倫理)」そして「ホスピス」を希求する運動をはじめた。彼のなかでは、戦争とホスピスは「いのち」で結びつけられていた。米沢慧は、この岡村の運動を支え、没後もその遺志を継いで運動をつづけている。

いっぽう、吉岡忍は、高校時代から「ベトナムに平和を! 市民連合」(ベ平連)に参加し、『ベ平連ニュース』の編集、脱走アメリカ兵の逃走援助などを行なった。そして、「エイズ」という病気の「社会性」をめぐっていちやくルポルタージュを書いた。

ベトナム戦争を起点にして、「現代社会」における戦争と医療の問題を「いのち」の観点から解き明かすのが、この回のテーマである。

米沢 慧 (評論家)

[略 歴]

1942年生まれ。早稲田大学教育学部卒業。評論活動のかたわら、高齢化社会の家族像を模索する「ファミリー・トライアングルの会」や故岡村昭彦氏の遺志を継ぐ AKIHIKO ゼミを主宰。看護、医療、生命を考える自主ゼミ活動も展開している。

[主要著作]

『新ホスピス宣言』(共著) 雲母書房, 2006年。

『病院化社会をいきる——医療の位相学』雲母書房, 2006年。

『ホスピスという力——死<sup>いのち</sup>のケアとはなにか』日本医療企画, 2002年。

『「還りのいのち」を支える』主婦の友社, 2002年。

吉岡 忍 (ノンフィクション作家)

[略 歴]

1948年生まれ。早稲田大学政治経済学部在学中から「ベトナムに平和を！市民連合」(ベ平連)に参加。日本航空墜落事故を扱った『墜落の夏』で第9回講談社ノンフィクション賞受賞。放送倫理検証委員会委員としてTBSの「不二家報道問題」等の検証を行なった。

[主要著作]

『奇跡を起こした村のはなし』ちくまプリマー新書, 2005年。

『いつか晴れた海で——エイズと平田豊の道程』読売新聞社, 1994年。

『エイズの表情』アドバンテージサーバー, 1993年。

『墜落の夏——日航123便事故全記録』新潮社, 1986年, 新潮文庫, 1989年。

7月5日

## 揺らぎのなかの「いのち」

最 首 悟  
立 岩 真 也

日本国内の現代史に目を向けると、1961年に胎児性水俣病患者が初めて確認された。「平和国家」日本の非軍需産業によって行なわれたこの「いのち」への重大な侵犯は、2008年の現在に至ってもいまだに解決していない。「水俣」を問うことは、産業社会のなかに生きるわれわれの「いのち」の原点を問うことでもある。

1970年には横浜の主婦が脳性麻痺児のわが子を殺害するという事件が起きた。世論やマスコミが「加害者」に同情するという状況のなかで、脳性麻痺者の横塚晃一は「母よ！ 殺すな」という重い言葉を発した。ここにも「いのち」をめぐる思索のひとつの原点がある。

「水俣問学」の最首悟と「生存学」の立岩真也の対話を通して、「いのち」をめぐる錯綜と葛藤が描き出される。

最首 悟 (和光大学名誉教授)

[略 歴]

1936年生まれ。東京大学大学院理科系動物科博士課程中退。77年から水俣にかかわる。76年に生まれた三女星子のことを中心に学問、水俣を考え続ける。無用の用、無思想の思想、無派の派のなかに「いのち」を浮かび上がらせようとしている。

[主要著作]

『水俣五年——ひろがる「水俣」の思い』(共編著) 作品社, 2007年。

『星子が居る』世織書房, 1998年。

『明日もまた今日のごとく』どうぶつ社, 1988年。

『生あるものは皆この海に染まり』新曜社, 1984年。

立岩 真也 (立命館大学大学院先端総合学術研究科教授)

[略 歴]

1960年生まれ。東京大学文学部卒業。同大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。千葉大学文学部助手, 信州大学医療技術短期大学部講師, 助教授, 立命館大学政策科学部助教授を経て, 2004年より現職。

[主要著作]

『希望について』青土社, 2006年。

『自由の平等——簡単で別な姿の世界』岩波書店, 2004年。

『弱くある自由へ——自己決定・介護・生死の技術』青土社, 2000年。

『私的所有論』勁草書房, 1997年。

7月10日

## 討 論 会 (3)

清 水 透

高草木 光 一

第 部および全体の講義を締めくくるにあたっての討論会。必要に応じてゲスト・スピーカーを招くこともありうる。

ただし、この回は、5月31日(土) [早慶戦ため休講の予定] の補講日のため、教室、時間は未定である。西校舎1階の経済学部掲示板に注意すること。

〈MEMO〉

7月12日

## 「いのち」の構築

芹 沢 俊 介

伊勢崎 賢 治

先端医療はいったいどれだけの生命を救っているのだろうか。たとえば脳死・臓器移植手術の術後生存者は、この10年間で200名程度に過ぎない。それに対して、1998年以降、日本では毎年3万人以上の自殺者が出ている。この日本社会の倒錯は、「いのち」の問題は医学だけに関わるのではない、ということを改めてわれわれに確認させる。また、世界に目を向ければ、いまだに各地で殺戮が繰り返されている。平和憲法をもつ日本は、どのようにして「いのち」を守り、救うことに貢献しうるのだろうか。

子どもの問題、暴力の問題を長年考察してきた芹沢俊介が国内の「平和」問題を、東チモール、シエラレオネ、アフガニスタン等で武装解除などの平和構築作業を直接指揮した経験をもつ伊勢崎賢治が国外の「平和」問題を語るこの最終回で、「いのち」の全体的見取図が展望される。

芹沢 俊介（評論家）

[略 歴]

1942年生まれ。上智大学経済学部卒業。文学論、家族論、情況論などの分野で評論活動を行なう。

[主要著作]

『もういちど親子になりたい』主婦の友社、2008年。

『「いじめ」が終るとき——根本的解決への提言』彩流社、2007年。

『家族という暴力』春秋社、2004年。

『引きこもるという情熱』雲母書房、2002年。

伊勢崎賢治（東京外国語大学大学院地域文化研究科教授）

[略 歴]

1957年生まれ。早稲田大学理工学部建築学科卒業。同大学院理工学研究科都市計画専攻修士課程修了。東チモール、シエラレオネ、アフガニスタン等で平和構築作業に従事する。立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科教授を経て、2007年より現職。

[主要著作]

『自衛隊の国際貢献は憲法九条で』かもがわ出版、2008年。

『日本の国際協力を武力はどこまで必要か』（共著）高文研、2008年。

『武装解除』講談社現代新書、2004年。

『東チモール県知事日記』藤原書店、2001年。

◆東アジア共有の価値観をどこに求めるか？

A5判 定価2100円

## 連続講義 東アジア

# 日本が問われて いること

松村高夫・高草木光 一編

日本で「東アジア共同体」論議が高まる一方で、近隣諸国では「反日」の機運が高まっている。いま東アジアでは協同して取り組むべきどのような課題があり、日本はどのような選択を迫られているのか。各分野の一六名の論客による、熱のこもった講義と討議の記録。

◆時代を牽引し続けた作家が語り下ろした実践哲学

# 生きる術としての折口学

— 小田実 最後の講義 —

小田実 飯田裕康・高草木光 一編

四六判 定価2000円

市民の立場から行動し発言し続けて逝った作家、小田実。二〇〇一年から〇二年に慶大で行なった連続講義「現代思想」を編む。私たち一人ひとりが「生きるための哲学」が語り下ろされる。



岩波書店



〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋2-5-5  
<http://www.iwanami.co.jp/>

[定価は消費税5%込みです]